



第2回 スタイル適用のポイント「セレクトア」を覚えよう

連載第一回でイヤというほど「HTMLが大事だ」、「HTMLをまずは覚えよう」と説明しました。CSSを使ってHTMLにデザインを適用するためには、どの部分に適用するかという「場所」を指定しなければ始まりません。ときにはページ内に含まれる特定のタグすべて、ときにはピンポイントでという風にです。その場所を指定するためにあるのが「セレクトア」であり、うまく使いこなさなければ作業は複雑化しスタイル指定も肥大化します。ここでしっかりとセレクトアの基本を押さえましょう。

(解説:こもりまさあき)

HTMLの記述とセレクトアの関係

そもそもHTMLは、文書に含まれる内容に対して目には見えない情報上の意味を与えたり、文書そのものの情報構造を伝えるためにあるものです。ページの大見出しにあたるテキストは、h1のタグ(要素)を使って「<h1>大見出しのテキスト</h1>」というように、該当箇所を開始タグ(<要素名>)と終了タグ(</要素名>)で囲むことで、内容の情報上の意味が伝わります。h1要素の出現回数は同一ページ内ではさほど多く出てきませんが、それ以外の要素(例えば本文の段落を表すp要素など)は内容次第で頻繁に出てくる可能性があります。

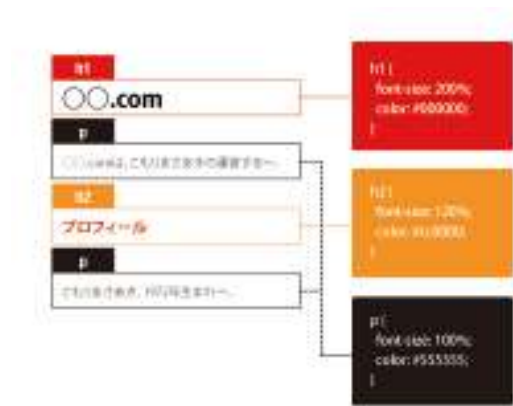
ここで、古くからのやり方であるHTMLに直接装飾指示をする方法を再考してみましょう。ページ中に何十箇所もp要素の段落があり、それぞれにタグや属性を使った装飾指示を指定していたら、それだけで日が暮れてしまうぐらい大変です。さらに、それが何百ページもあったりしたら……。

ページ内に含まれるp要素ひとつ一つに、同じフォントやフォントサイズ、文字の色などといった装飾指示をHTML内で入れていくのではなく、特定の要素だけに一括で同一の指示を与えることができた方がはるかに生産性が高まります。HTMLの文書構造と装飾指示を分離する利点はこのようなところにもあるわけです。文書内の特定の要素を装飾するためにCSSがあり、場所の特定のためにCSSのセレクトアを利用すると覚えておきましょう。

まずは基本中の基本となるセレクトアを覚えよう

前出のh要素やp要素といったいわゆるHTMLのタグは、「タイプセレクトア」と呼ばれるセレクトアを使うことで、ページ内に含まれるそのタグでマークアップされた内容に同一の装飾指示を与えることが可能です。これは単純に「要素名 { スタイル指定 }」という記述方法になります。つまり「p { スタイル指定 }」とすることで、ページ中のすべてのp要素に対して、同一の装飾が適用されるというわけです。

[HTML]	[CSS]
<pre><body> <h1>〇〇.com</h1> <p>〇〇.com は、こもりまさあきの運営する～。</p> <h2>プロフィール</h2> <p>こもりまさあき。1972年生まれ～。</p> — (中略) </body></pre>	<pre>h1 { font-size: 200%; color: #000000; } h2 { font-size: 120%; color: #cc0000; } p { font-size: 100%; color: #555555; }</pre>



【図1】タイプセクタを使えば、HTMLに用意されたタグに対して直接スタイルを適用することができます。同一要素が複数含まれる場合は、すべてに対して同じ装飾が適用されるというわけだ

では、p要素が数多く含まれていて特定のブロックだけに指示をしたい場合はどうでしょう。タイプセクタを使って同じp要素には同一の指示を与えることができますが、特定の場所だけを変更したい場合、それだけでは困ります。

そんなときは、HTMLの「id属性」を使うことで簡単に解決します。やはりHTMLの記述が大事なのです。このid属性を指定した箇所に指示を与えるためのセクタは「idセクタ」と呼ばれ、「#id属性名 {スタイル指定}」という記述となりid名の前に「#」が付きま。ちょうどHTMLで特定箇所のアンカーポイントにリンクするときに「～.html#top」と記述しているのと似ていますね。このidセクタを使えば、同一の要素が複数あっても場所の特定が可能になるのです。

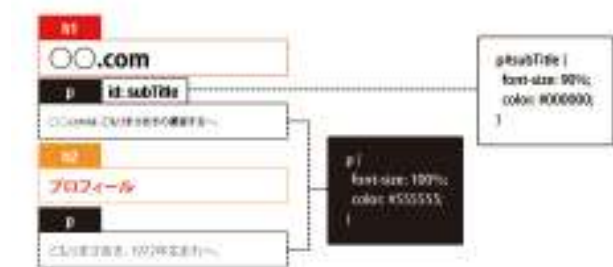
HTML文書中で場所を特定できることは、何もCSSデザインだけが恩恵を受けるわけではありません。ブラウザから見ても文書構造に加え場所の特定ができますし、JavaScriptを使って特定の場所の内容を切り替えたい場合などでも重宝するのです。装飾の有無に限ったことではありませんが、少なからずそのような可能性がある場合は、HTML中にid属性を挿入しておくとう便利す。

[HTML]

```
<body>
<h1>〇〇.com</h1>
<p id="subTitle">〇〇.com は、こもりまさあきの運営する～。</p>
<h2>プロフィール</h2>
<p>こもりまさあき、1972年生まれ～。</p>
—
(中略)
</body>
```

[CSS]

```
p {
  font-size: 100%;
  color: #555555;
}
p#subTitle {
  font-size: 90%;
  color: #000000;
}
```



【図2】最も簡単に特定の要素のみにスタイルを適用するにはidセクタを利用する。この場合はid属性「subTitle」が割り当てられたp要素のみ指定したスタイルが上書きされ、適用される

例えば、id属性に「title」と指定されたh2要素を特定したいなら、単純に「#title {スタイル指定}」としてもよいですし、「h2#title {スタイル指定}」と要素名をプラスして場所をわかりやすくしてもよいでしょう。

さて、覚えておきたい基本中の基本セクタの最後です。

最後のセクタは「classセクタ」と呼ばれるものです。HTML中のclass属性に対してスタイル指定を可能にします。class属性はHTML中で同一名での複数指定が可能ですので、一般的に同じスタイルを複数の要素に一度で適用できるものです。言ってしまうと、学校のクラスに似ているわけで、「明日からAクラスの人たちは衣替え」と言われたら「Aクラスの人たちだけが冬服に衣替えをする」といった感じでしょうか。

このセクタは「.class属性名 {スタイル指定}」という記述になり、class属性値の前に「.(ドット)」を付けてセクタ名としま

す。価格表などのテーブルで組まれた表組みの特定のセルだけにスタイルを指定したいのであれば、HTML中のそのセルに対して「class="product-name"」とclass属性を指定し、「.product-name { スタイル指定 }」もしくは「td.product-name { スタイル指定 }」と記述します。

[HTML]

<body>
<div>
<h2 class="entryTitle"> ブログタイトル 1</h2>
<p> ブログ本文 </p>
</div>
<div>
<h2 class="entryTitle"> ブログタイトル 2</h2>
<p> ブログ本文 </p>
</div>
—
(中略)
</body>

[CSS]

h2.entryTitle {
font-size: 110%;
color: #cc0000;
}

The diagram illustrates how the same CSS rule can be applied to multiple HTML elements. On the left, two separate HTML blocks are shown, each containing an

element with the class attribute set to 'entryTitle'. The first contains the text 'ブログタイトル 1' and the second contains 'ブログタイトル 2'. Dashed lines from the 'class' attribute of each point to a central CSS rule box on the right. The CSS rule is defined as 'h2.entryTitle { font-size: 110%; color: #cc0000; }', demonstrating that a single class-based rule can style multiple elements across the document.

【図3】同一要素が複数回出現する場合、同じスタイルを適用したいものにはclass属性を共通で割り当てることで同一の装飾は可能になる

ただし、HTML中におけるclass属性の指定は注意しておきたい点もあります。ページ内で何回も使い回せるため、ただ文字の色を赤くしたいから「.redtext { … }」というようなあまり意味のない名前のセレクトを大量に作っていくと、CSSそのものが思いつきのセレクトでいっぱいになり見通しも悪くなります。class属性は内容に情報構造上の意味を与えたりするものではありませんが、HTML文書中で場所を特定するのにもある程度機能するよう、属性名を指定しましょう。属性名が、複数の内容そのものを情報の意味としてグループ化するラベルようになっていれば、自分以外の人が見てもわかりやすいでしょう。

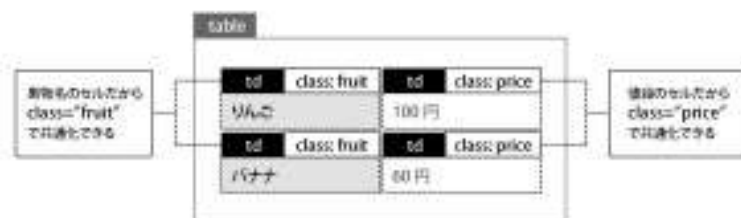
[HTML]

<body>
<table>
<caption> フルーツ価格表 </caption>
<tr>
<th> フルーツ </th><th> 価格 </th>
</tr>
<tr>
<td class="fruit"> りんご </td><td class="price">100 円 </td>
</tr>
<tr>
<td class="fruit"> バナナ </td><td class="price">80 円 </td>
</tr>
</table>
—
(中略)
</body>

```

【CSS】
td.fruit {
  color: #000000;
  background-color: #c0c0c0;
}
td.price {
  color: #555555;
}

```



【図4】同じ装飾ができるからと適当にclassセクタを作りclass属性を割り当てていくと混乱の元になる。現状class属性には、HTML文書での情報上の意味はほとんどないが、その内容に対して共通化できるラベルを貼るようなイメージでclass属性を割り当てておけば、後からのメンテナンスも楽になる

Point

文書内の特定の要素を装飾するためにCSSがあり、場所の特定のためにCSSのセクタを利用する